

あだしの  
化野の墳墓  
— 蓋付蔵骨器 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



金銅製の蓋 蓮華座の上に梵字の「五」をのせる



蔵骨器として使われた褐釉四耳壺

嵯峨天龍寺の北を西に入り、竹葉の折り敷く小径を北へ行くと、ほどなく野宮神社の小柴垣に囲まれた黒木の鳥居の前に出る。落柿舎は、江戸時代の面影をそのままに嵯峨野の風情を伝えている。百人一首を撰した藤原定家が、山荘を営んでいた小倉山を西にみて、愛宕道を北に行くと二尊院、祇王寺さらに念仏寺へとつづく。すでにこのあたりは、

人の世は 思へばなべて

あだしのの

よもぎがもとの ひとつ白露

と、藤原良経の歌にも詠まれる往古よりの無常所(葬送地)として名高い化野である。

1993年7月20日、化野念仏寺の南側一帯(右京区嵯峨鳥居本化野町)で、公共下水道工事にもなう遺跡の立会調査を行っていた。多数の石材が出土し、その際に金属製の蓋と陶器の壺が割れた状態で出土した。壺の中には、灰白色の火葬骨と炭が入っていた。その場で工事を一時中断してもらい、遺物を採集した。

散乱した石材や土砂を取り除き、壁面を観察すると、地下わずか45cmの位置で厚さ10cmの炭層に覆われた幅70cmの小石室が見つかった。

蔵骨器はこの石室の中から発見され、破片の断面観察及び火葬骨

や炭などの状態からもともと完全な形であったと思われた。蔵骨器として使われていた壺は、褐釉陶器で、高さ20.8cm、口径9.1cm、胴部最大径14.4cm、底部径6.7cmの大きさである。4個のひも通し穴をもつことから四耳壺と呼ばれているものであるが、その内1箇所は焼成前に欠落していた。内外面ともに薄く釉を施し、胴部上位には黒褐色の鉄釉をかけ流している。12世紀後半代のもので、中国の華南地方で作られ輸入されたものである。

蓋は直径10.1cm、高さ1cm、厚さ0.1cmの大きさであり、全面を覆っていた錆(緑青)を落とした

結果、銅に鍍金（めっき）を施した金銅製であることが判明した。線彫で蓋上面に大らかな表現で蓮華座を描き、その上に正確で力強く梵字の「𑖀」を描いている。

線彫の細部の表現は大らかで、蓮華座の表現法としては古い様相を示しており、また梵字を丁寧にあらわしていることなどは、12世紀後半代の仏教美術工芸の特徴を示している。さらに蓋の形状はこの時期の一般的な和鏡の形によく似ている。

蓋の内面には壺の口縁部との接触痕が鮮明に残り、また壺の口縁部外面にも緑青が付着している。壺に蓋を被せると口径のサイズは一致する。陶製蔵骨器の金銅製蓋は他に出土例がなく、美術工芸品としても価値の高いものである。

ここで少し想像力を逞しくしてみよう。梵字の「𑖀」は密教の中心本尊である大日如来を現わすこ

とは知られている。故人の周囲は悲しみにくれながらも、この陶製の壺を京内にある仏所（仏像・仏具等を作る工房）に持ち込み、当時としても例をみない蔵骨器の蓋を特別に誂えさせたのであろう。「大日如来と一体になって極楽往生してください」との周囲の思いがこの蓋を作らせたのであろう。この金の輝きはその願いを800年後の今に伝えている。

残念ながらこの墓は当時の姿を留めてはいない。当時の墓前供養は原則として一周忌までとされており、その後の追善は菩提寺院に移るとされていた。たとえ貴族の墓であっても、放置され荒れるにまかせて、誰の墓か不明になっていたと貴族の日記に記されている。

墓の上部構造を知る手がかりは「絵巻物」に見つけることができる。平安時代末期に描かれた『餓鬼草紙』は、巧みな自然描写によって

当時の葬送地の様子を伝えている。その中には円丘状の盛り土がなされ、その上に卒塔婆や五輪塔が建立されている墓などが描かれている。

今回の調査でも、この付近で石製の五輪塔などが出土しており、この墓も『餓鬼草紙』にみられるような姿をしていたのであろう。

この蔵骨器は、経塚の形式が中世墳墓に取り入れられる過渡期にあたり、平安時代末期の墓制を知る上でたいへん貴重な資料である。この時代は、密教の教えと極楽往生を願う浄土教の教えが同時に混在する末法の時代であり、渾然一体となった当時の信仰状況をよく表わしている。

さらに平安京の葬送地としての化野の姿を解明していく契機となり、今後の化野一帯での調査の重要性が改めて強調されることとなった。（小檜山一良）



平安時代末期に描かれた無常所（葬送地）の様子 『餓鬼草紙』東京国立博物館蔵  
五輪塔や卒塔婆をのせた塚の下に蔵骨器が埋納されたのであろう。